

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：14602

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580174

研究課題名(和文) 前方後円墳の類型化と地域性に関する歴史GISの応用的研究

研究課題名(英文) An Applied Research of Historical GIS on classifying and regional characteristics of Keyhole-shaped tumuli

研究代表者

出田 和久 (IDETA, Kazuhisa)

奈良女子大学・研究院人文科学系・教授

研究者番号：40128335

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)： 前方後円墳について時期別や規模別分布、立地等に関して全国的視点の下に検討を進めた。その結果、時期別に見ると、1期は前方後円墳は圧倒的に近畿以西の西日本に集中しているのに対して、前方後円墳は相対的に東日本に多いことや前方後円墳は西日本では4期にほぼ消滅状態になることなど東西あるいは地方レベルでの地域差を詳細に明らかにすることができた。さらには地域毎の前方後円墳の動態と諸豪族との関連についても検討を試みた。

また、全国の前方後円墳データベースを構築したので、これを活用して成果発信のためにデータベース利用者が興味・関心に応じて自ら各種分布図を作成できる「WebGISデータベース」を構築した。

研究成果の概要(英文)： A Keyhole-shaped tumulus, a Zempokoehun, was made as a tomb of ancient powerful clan leader from the 4th century to the 6th century in Japan. I made various distribution maps of Zempokoehuns according to scale of each Zempokoehun, to the geographical condition where it had been located and to the time when it had been constructed.

Then I examined the distribution maps based on a nationwide viewpoint. As a result, the burial mounds were made concentratedly in Western Japan at the beginning, to the west of Kinki, but gradually spread through the whole country. And I was able to clarify the local difference between the phase of diffusion of the tombs and diffusive situation in detail. Besides, I tried examination about the association between change of distribution of the tombs and the power of powerful families in every area.

In addition, I constructed a "WebGIS database of the Zempokoehuns".

研究分野：歴史地理学

キーワード：前方後円墳 地域性 GISデータベース 立地 考古地理学 古墳時代 歴史地理学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 前方後円墳は日本列島の北は岩手県から南は鹿児島県にまで広く分布し、その数は前方後方墳も含めると約 5,300 基に達する。その規模や形態、内部構造、内部主体、副葬品等の諸特徴には地域的な差が見られる。

(2) 考古学では、前方後円墳という古墳の形態の拡散・伝播はいわば畿内王権の政治勢力による支配領域の拡大を示すとして、前方後円墳を頂点とし、前方後方墳、円墳、方墳という墳形と規模によって序列・格付け、実力表示が図られたという「前方後円墳体制」唱えられ、半ば定説として扱われている。しかし、各地域における前方後円墳の造営時期や規模、形態および内部構造・内部主体さらには副葬品の特色等を具体的に検討しての「前方後円墳体制」の実証的な検証は必ずしも十分とはいえない。これまでに、部分的には各地域の特徴を明らかにしようとした研究はあるが、それは必ずしも全国的視野の下でなされたものとはいえない。

(3) そこでまず歴史地理学的視点から、これら前方後円墳の全国的な分布のありようを明らかにし、地域的特色を明らかにする必要があると考えた。対象とする古墳が約 5,300 基にのぼることから、方法としてはデータベースを構築し、GIS を活用して地域的検討を全国的視点から行なう。本研究は、社会的に関心の高い前方後円墳を対象として GIS を歴史地理学研究に応用するとともに、成果や構築したデータベースを研究者の利用にとどめるのではなく、社会的に大変関心の高い前方後円墳が開発の中で徐々に姿を消している現状に鑑み、構築したデータベースを基に「WebGIS データベース」として、データベース利用者がデータを利用して様々な属性を指標にして自ら各種分布図を作成し、利用者の興味と関心を満たすような情報発信を行い、前方後円墳への理解を一層高める必要性がある。

## 2. 研究の目的

本研究では、これまでに構築した九州地方と近畿地方を中心とする前方後円墳データベースを拡充して、全国の約 5,300 基の前方後円墳（前方後方墳を含む）を対象にデータベースを構築したうえで、以下のようなことをめざす。まず前記の前方後円墳データベースを基礎に、Historical-GIS(以下、H-GIS と記す)データベースを構築する。これを活用して、前方後円墳について分布論的に検討を加える。全国的な視野の下に前方後円墳分布の地域的な特色を明らかにする。全国的なスケールで前方後円墳の分布の態様を明らかにする。これらを通じて日本古代史の古代豪族等に関する研究成果も踏まえて、古代国家の成立前の日本列島の政治状況を含めた地域相を描き出す。以上の成果をもとに、いわゆる「前方後円墳体制」についてその妥当性を全国的視野から再検討する。

構築したデータベースを基に「WebGIS データベース」を制作し、公開する。

## 3. 研究の方法

(1) データベースの構築にあたっては、基礎資料として『前方後円墳集成』(山川出版社、1991年~2000年)を使用し、さらに新資料を発掘調査報告書等により補充し、データの充実を図る。データ化の項目として、規模、築造時期、石室(石槨)の構造を中心とする内部構造、内部主体(棺の形態や材質)、三角縁神獸鏡や画文帯神獸鏡等の青銅鏡の種類や碧玉製腕飾りや勾玉類等の威信財及び刀剣や甲冑・武具、農工具などの副葬品、埴輪の型式や葺石等の外表施設等の属性項目を考え、膨大となるデータ量の抑制を図るための検討を行う。また、主要古墳については、GIS データベースとして基礎となる位置情報を正確に取得するとともに、立地条件を検討したり、周辺からの「見え方」を検討したりするために現地調査を行なう。また、主要古墳については可能な範囲で現況写真をデータとして取り込む。

(2) ArcGIS を使用して H-GIS データベースを構築し、造営時期や規模、副葬品等に関する属性データを様々な組合せて各種分布図を作成する。これを活用して、分布論や伝播論の基礎の上に考古学的研究の成果も取り入れて、まずいわゆる畿内型の前方後円墳が具体的に全国の各地域にどのように伝播したのか、造営時期や規模にも注目しながら、伝播過程や各地域の政治構造の変化の状況を踏まえて地域的特色の展開を検討する。

(3) 上記に続いて、多面的に検討を加え、全国的なスケールで前方後円墳の地域的な特色を究明し、古代豪族の動向を含め古代国家の成立前の日本列島の地域相を描き出すことを目指す。

(4) 「WebGIS データベース」用に Web で発信できる程度にファイル容量をスリム化するために、画像を掲載する古墳の選別や属性データ項目の整理を行う。これをもとに仕様を決定し、専門業者に「WebGIS データベース」の制作を依頼する。

(5) 制作された「WebGIS データベース」の動作確認とデータの確認を行なった上で公開する。

## 4. 研究成果

### (1) 時期別・規模別の分布

全国約 5,300 基の前方後円墳の GIS データベースを構築した。これにより時期別・規模別に前方後円墳を整理し、その分布をみたところ次のようなことがいえそうである。

1 期：前方後円墳は圧倒的に近畿以西の西日本に集中しているのに対して、前方後方墳は相対的に東日本に多い。墳丘長が 100m を超える大前方後円墳は 11 基(『集成』で 2 期とされる西殿塚古墳を除く)あり、備前の浦間茶臼山古墳(138m、3 位)と中山茶臼山古墳

(120m、7位) 播磨の丁瓢塚古墳(104m、11位)を除くとすべて近畿中央部にある。東日本では相模の愛甲大塚古墳(伊勢原市)が70mで最大である。また、墳長50m未満が7割を超え、全時期を通じて小規模古墳の比率が突出して高い。また、前方後円墳の分布が古墳における共通の首長霊継承祭祀型式を有する集団の分布を示しているとするれば、東日本についてはその様な集団はまだ少数で分散しているといえる。

さらに、前方後円墳の出現及び纏向型前方後円墳の位置づけの議論とも関わるが、箸墓以前に遡るとみられる前方後円墳が、九州北部、中国、四国、近畿、さらに、中部、関東の各地方にもみられる点には注意を要する。これらの分布のありようは九州北部と中国地方及び纏向地域に小さな集中傾向が窺える。また、東日本では、上総に神門4号墳(市原市、49m)や同3号墳(47.5m)などのように箸墓以前に遡るとみられる前方後円墳が数基分布し地域的には孤立し存在しているようであるが、これが西方からの伝播であるのか他地方の同時期の前方後円墳との関連に関心が持たれる。

立地に関してみると、出現期の箸墓の立地は低平な尾根状の微高地を巧みに利用しており、周囲の水田面との比高はほとんどないに等しく、奈良盆地所在(といっても東南部の天理市南部・桜井市北部付近)の1期古墳は同様に周囲の平地との比高がほとんどない(因みに交野市所在の森1号墳は比高約100m)。また、纏向石塚古墳以外すべてが墳長100m以上と規模が大きいのに対して、他地域の1期の前方後円墳の立地は浅小井古墳(近江)のように平野に立地するもの4基を除くと、ほとんどが丘陵の稜線上であり、丁瓢塚古墳を除くと大半は墳長50m以下で比高が20m以上あり、大きな差がある。このことは、前方後円墳に対する意識の差があるか、比高を高くすることによって首長霊を高く祀ることを強調しようとし、規模が小さいことを補おうとしたのではないかと思わせる。2期:近畿以西の前方後円墳は減少するとともに小規模なものが大半となるが、東日本では増加する。しかし、下総、越前・加賀での減少が目立ち、一方では尾張・美濃及び上野・下野の北関東、能登南部(口能登)では増加している。また、尾張北部から美濃、伊勢北部、近江の諸地域での分布が比較的多くかつ1期から継続してみられる。一方、前方後円墳は、関東で本格的に採用されるようになり、規模も比較的大きいものが目立つようになる。1期にはほとんど目立たなかった毛野地域に100m超の大型古墳が出現するとともにその周辺に中小古墳が見られるようになる。また、上総で1期古墳の周辺に同様に100m超を含め中小古墳が出現する。この時期の最大は大和の西殿塚古墳(天理市、219m。これを1期とする見解も強い)で、ついで桜井茶臼山古墳(桜井市、207m)であるが、注

目すべきは2期~3期とされる常陸の梵天山古墳(常陸太田市、151m)が2期であれば第3位となり、さらに1期~4期(前期)とされ時期が今ひとつ明確ではない日向の生目3号墳が2期であれば第4位の規模となる。時期がほぼ確かなものに限ると、第3位に備前の尾上車山古墳(岡山市、135m)となり、ついで大和の黒塚古墳(天理市、127.5m)、上総の今富塚山古墳(市原市、110m)となる。(図1)

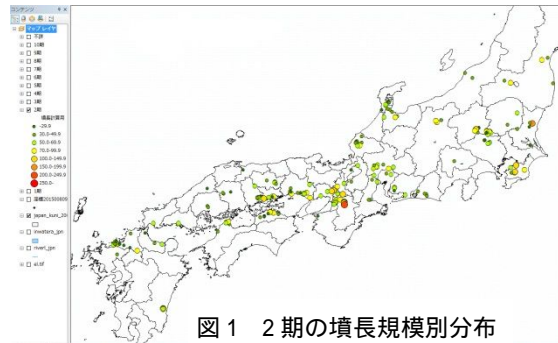


図1 2期の墳長規模別分布

3期:数は300基ほどでほぼ1.5倍になり、このうち前方後円墳は68基と若干減少し、近畿に16基、近畿以西では僅か7基となり、分布の東西差がより顕著になる。最大は大和の大和・柳本古墳群の渋谷向山古墳(天理市)の300mであるが、これに次ぐのが佐紀盾列古墳群の五社神古墳(奈良市)の275mで、ついで2期の桜井茶臼山古墳にほど近いメスリ山古墳(桜井市)の250mである。このほか大和・柳本古墳群の行燈山古墳(天理市)が242m、佐紀盾列古墳群の宝来山古墳が227m、佐紀陵山古墳(ともに奈良市)が207m、和泉の摩湯山古墳(岸和田市)が200mと、200mを超えるものが7基あり、すべて近畿中央部にあるが、その内の6基が奈良盆地に位置し、3つのグループを形成しているように見える。30m未満が20基に減少する一方で100m以上が17基から50基と3倍になり、総じて墳丘の大規模化が顕著に窺える。東日本では新たに甲斐に169mの墳長を有する甲斐銚子塚古墳(甲府市、4期の可能性もある)が現われ、100mを超えるものは計16基に達する。しかし、100mを超えるものは全体で45基あり、2期と傾向は変わらないと言えそうである。また、東日本での前方後円墳の数は78基となり、70m以上150m未満の中型乃至大型古墳が41基と過半数、52.5%を占めるが、全国的に大型化が進行しており、中型乃至大型古墳の比率は62.6%であるので、相対的に規模が小さいと言えそうである。4期:最大は大和の佐紀盾列古墳群の佐紀石塚山古墳(奈良市)の218mで、3期のように250mを超えるものはない。ついで馬見古墳群の巖山古墳(広陵町、210m)、河内の古市古墳群の津堂城山古墳(藤井寺市、208m)である。3期には150mを超えるものは12基、4%であり、4期には16基、7.1%と比率が増加している。150m超の大古墳の分布をみると、

河内3基、大和3基、和泉1基と畿内地域が多数を占めるが、備前と上野に各2基、日向と陸奥に各1基と地方にも大古墳が複数みられるようになる。前方後円墳の数は減少しているが、70m未満の古墳で減少が大きく、全体として大規模化が進行している。地域的には讃岐での小規模墳の減少、関東、越前～近江での70m未満の古墳の増加、九州北部での70m以上100m未満の中規模墳の増加が目につく変化である。また、東北地方で150mを超えるものが初めて出現し(名取市、雷神山古墳、168m)、これは全時期を通じて東北地方最大であり、4期では7番目の規模で、東国では上野の浅間山古墳(高崎市、171.5m)に次ぐ規模である。全時期を通じて東日本の古墳では7番目に大きく、内部構造や内部主体、副葬品は明らかではないが、後円部3段築成、前方部2段築成と、近畿中央部の大古墳と同様に後円部が3段築成である点は、後円部の直径の大きさと高さからによる技術的帰結とみられる。前方後方墳は29基に急減し、近畿以西では近畿に6基見られるのみとなる(尾ノ崎方形周溝墓14号墳他2基は墳長不明)。最大は下野の上侍塚古墳(大田原市)で114m、ついで美濃の粉糠山古墳(大垣市)の100mで、60mを超えるものは9基で、近畿以西では山城の大住車塚古墳(京田辺市)の66mのみである。

5期:全体で160基ほどに減少するとともに30m未満の前方後円墳は僅か数基となる一方で、和泉の百舌鳥陵山古墳(堺市)の360mが最大で、備中の造山古墳(岡山市)の355mが続き、墳長100m以上の大古墳が30%以上を占め、大規模化はピークとなる。150mを超える巨大古墳が19基、約12%あり、うち14基が近畿(大和・河内)にある。他に上野に2基、備前・日向に各1基あり、上野の太田天神山古墳は210mで、全体でも当期の8位の規模である。さらに詳細にみると大和8基、河内3基、和泉2基、上野2基、その他4基であり、大王墓とされるものが河内・和泉に所在する時期であるにもかかわらず大和の佐紀盾列古墳群に大型古墳が集中している一方で大和・柳本古墳群から前方後円墳が姿を消した点は興味深い。しかし、地方では備前の造山古墳が群を抜いて巨大で350m超である点は、近畿中央部の同時期とみられる仲津山古墳や市庭古墳などの大王墓とされる古墳に勝る規模である点は注目される。いわゆる前方後円墳体制により、一律に一元的に近畿中央部にあった王権により規制がなされていたとすれば、その位置づけに苦しむ現象と言えよう。また、東北地方で墳長70mを超えるような大古墳が姿を消しているほか、尾張北部から美濃南部および播磨で100m超級が姿を消し、近畿中央部でも100m超級の古墳が減少している。

6期:全体で144基とさらに減少する。河内の誉田御廟山古墳が425mと群を抜いて巨大であるが、これに次ぐのが備中の作山古墳の

286mである点は、5期と同様の様相であり興味深い。150mを超えるものは大和のウツナベ古墳(奈良市、270m)、川合大塚山古墳(北葛城郡河合町、193m)和泉の西陵古墳(泉南郡岬町、210m)、および山城の久津川車塚古墳(城陽市、180m)の6基だけであり、全体の4.2%に止まり、100m以上でも16%に止まる。古墳の大規模化は収束したようで、地方での150m超の大古墳が姿を消したほか、丹後、但馬、伯耆の山陰地域で100m超級の古墳が姿を消していることが注目される。一方では、東京湾南岸つまり房総半島北岸に100m超級の大古墳が3基出現したことは興味深い。7期:前方後円墳の数は全体で209基と増加に転じるが、規模についてみると和泉の大山古墳(堺市、486m)が群を抜いて巨大であり、ついで同じく百舌鳥古墳群の和泉の土師ニサンザイ古墳(堺市、290m)がある。150mを超えるものは河内の市野山古墳(藤井寺市、230m)、摂津の太田茶臼山古墳(茨木市、226m)、備前の両宮山古墳(赤磐市、196m)、河内の軽里大塚古墳(羽曳野市、190m)和泉の御廟山古墳(堺市、186m)、淡輪ニサンザイ古墳(泉南郡岬町、180m)の8基と少なく3.8%に、100m以上でも10%に止まり比率もさらに低下している。東北地方の北部(宮城・山形県)で5期に姿を消した前方後円墳が、墳長50m～70mの規模で再び出現したことや各地の内陸部で小規模墳が築造されている様子が窺える。墳長30m以上70m未満が65%と全体の3分の2を占め、全体としては小規模化が窺える。

8期:253基と築造数はさらに増加するが、その多くが墳長50m以下の古墳である。規模は河内の岡ミサンザイ古墳(藤井寺市、242m)が最大で、ついで摂津の今城塚古墳(高槻市、186m。「継体天皇陵」との見方もある)で、150mを超えるのはこの2基のみで、比率は大きく低下し0.8%に過ぎなくなっている。100mをこえるものをみても21基8.3%で、地域別にみると上野6基、大和5基、河内2基、日向2基、摂津、山城、伊賀、筑後、下野、武蔵各1基となっており、毛野(北関東)地域が近畿中央部とならぶ大型古墳の集中地域となっていることが分かる。70m超級の数をみても関東地域19基、近畿地方18基とほぼ同じであり、全体としても、比較的規模が大きいものは近畿地方、北関東地方周辺に集中し、日向、越前に小規模な集中がみられる程度である。前方後方墳は8基あるが、出雲5基、伯耆1基と集中を見せ、美作、安芸各1基と中国地方中部のみの分布となる。

9期:406基とさらに増加し、時期判明分で全10期を通じて最多となる。河内の河内大塚古墳(羽曳野市、335m)が突出して巨大であるが、これに次ぐのが大和の見三才古墳(橿原市)、武蔵の二子山古墳(埼玉県行田市)でともに138mである。100m超の古墳は18基、4.6%で、全体として小規模化が進行している。相対的に関東地方での古墳の増加



が顕著で、70m超級の古墳は 23 基、比率で全体の 38%を占め、近畿地方の 16 基、22%を大きく上回り、規模も比較的大きい。前方後方墳は、数は少なく僅か 7 基であるが、出雲の山代二子塚古墳は墳長が 92mと大きく、出雲に 5 基と山城と河内に各 1 基見られる。10 期：全体で 360 基と若干数は減るが、近畿地方で大きく減少し九州南部では姿を消すなど、多くの地域で前方後円墳の築造が大きく減少する中で、関東地方で非常な増加があるなど、地域差が顕著である。墳長が 100mを超えるものは 20 基で、近畿地方は最大の大和の丸山古墳（橿原市）310mと、それに次ぐ平田梅山古墳（高市郡明日香村）140mの 2 基のみで、16 基が関東地方に所在し、とくに毛野南部から武蔵北部に 10 基が集中している。70m 超の古墳 63 基の内 53 基が関東地方で、近畿は上記 2 基のほか山城の蛇塚古墳（京都市、75m）の 3 基のみで、九州北部 4 基、その他 3 基で、圧倒的多数が関東地方に分布している。大王墓とされる丸山古墳・平田梅山古墳は例外的な大規模墳としても、それに次ぐのが反乱を起した筑紫国造磐井の墓とされる岩戸山古墳というのは興味深い（ただし、磐井の乱は 527 年であるので、9 期の築造になるはずであるが）。（図 2）

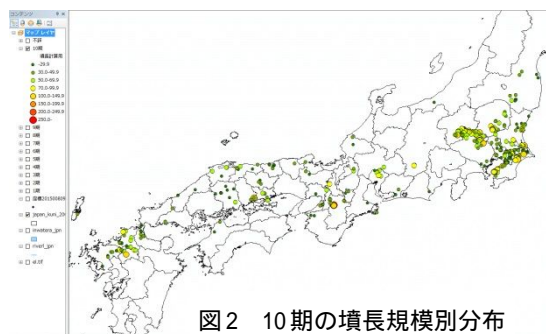


図2 10期の墳長規模別分布

10 期には近畿の大古墳は前記 2 古墳のみで、大前方後円墳は大王墓以外は造営されなくなっており、これらの他は奈良盆地や和泉では 70mを超えるものはなかった。奈良盆地では 596 年には蘇我馬子により飛鳥寺が造営されており、古墳に代わるもの（即ち寺院）が作られつつあり、古墳築造から寺院造営に諸豪族の関心が移っていく過程にあるとされる。地方での大古墳造営にも関心が払われなくなっていく時期なのであろう。しかし、この時期には寺院の造営はまだ本格化していないことから、大前方後円墳を築造した諸豪族の墳墓をめぐる動向に関心が持たれる。なお、前方後方墳は 6 基あり、やはり出雲に 4 基あり、地域的にも隣接しており 8 期から継続して造営されていることが窺える。

## （2）立地の検討

前方後円墳の立地は、全体では山地・丘陵がほぼ半数、ついで台地・段丘が 4 割を占める。このうち山地・丘陵では尾根や稜線上に立地するものが 3 分の 2 を占める。また、台地・段丘に立地するものは愛知県以東が全体

の 8 割を占めるのに対して山地・丘陵に立地するものは 3 割に満たないが、前期古墳では約 33%を占めるのに対して、後期古墳では約 25%であり、時期によって傾向を異にする。

そこで時期別にみると、表のようになる。1 期には東日本（ほとんどが千葉県）では「台地・段丘面上」、西日本では「山地や丘陵」に立地するものが卓越する。2 期になると九州では「台地・段丘面上」に立地するものが増加し、関東をはじめ東日本では「台地・段丘面上」および「台地・段丘の端・縁辺部」に立地するものが増加する。また、播磨から吉備にかけての地域では内陸に立地するものが目立ち、「山地や丘陵の尾根・稜線上」への立地が卓越する。3 期になると近畿でも縁辺部が否かは別として台地・段丘上への立地や沖積地など山地・丘陵以外の相対的に低地への立地が目立つようになる。3 期～5 期にかけては相対的に近畿以西における台地・段丘上への立地が比重を増加させる。近畿地方では 4 期になると台地・段丘や沖積地などの低地への立地が 3 割ほどに増加し、5 期には山地・丘陵への立地とほぼ同数になり、6 期には過半数に、さらに 7 期には 3 分の 2 を占めるに至っている。また、九州でも同様の傾向が窺える。全国的に見ても台地・段丘や沖積地などの低地への立地が 7 期に過半数を占め、9 期までほぼ同程度で推移し、10 期には 7 割近くに達する。10 期の急な比重の増加は、前方後円墳数が減少する一方で関東地方において急増し、その多くが台地・段丘や沖積地などの低地への立地であることによる。

このような地域差は、たとえば関東地方は他地域に比べて台地や段丘地形が比較的発達していることから台地・段丘に立地するものが多くなっていると考えられるように、地域の地形条件の相違によるところが大きいと思われるが、それだけではない。たとえば 4 期では、台地・段丘に立地する前方後円墳の平均墳長が 94.6m、5 期では 108.0m であり、山地や丘陵に立地するものがそれぞれ 62.2m、67.2m であるのに比べると規模が大きく、100m前後の大古墳になると丘陵や山地に立地するには地形的に困難が多く、平坦な台地や段丘上が選地されるのではないかとと思われる。

立地と地形・規模との関連を 7 期の場合を例にみると、東北、北陸、中国東部の各地方では山地・丘陵に立地するものが多く、その規模は大半が 100m未満である。北摂に 200m以上の古墳が山地・丘陵に立地するものとして現われているが、これは太田茶臼山古墳である。『集成』によると立地点の標高が 49m、比高 20～30mで低丘陵に立地となっているが、標高は 2.5 万分の 1 地形図によれば 28～29mとみられ、住宅地開発が進んでいるため地形については明言し難いが、低丘陵というよりも台地とする方が適切なようであるので、この墳長 226mの太田茶臼山古墳の立

表 時期別・立地型別一覧

	平野	稜線 端部	丘陵 鞍部	台地縁 辺部	台地 面上	その他	計
1期	21	87	15	3	15	2	143
2期	10	129	25	15	19	1	199
3期	21	178	49	21	24	6	299
4期	23	101	33	22	34	8	221
5期	19	58	28	17	32	2	156
6期	15	55	24	10	36	3	143
7期	31	63	24	21	58	8	205
8期	38	79	41	17	68	4	247
9期	44	119	76	49	106	8	402
10期	34	67	39	41	167	8	356
計	256	936	354	216	559	50	2371

表中の立地型の記載は以下のように略記している。  
 平地・平野、沖積地、自然堤防、砂丘等に立地：平野  
 山地や丘陵の尾根・稜線上、同端部に立地：稜線端部  
 山麓・丘陵、山地・丘陵鞍部に立地：丘陵鞍部  
 台地・段丘の端・縁辺部に立地：台地縁辺部  
 台地・段丘面上に立地：台地面上

地は台地・段丘上であると考えておきたい。したがって、山地・丘陵に立地し墳長が100mを超えるものは7期では肥前の船塚古墳114mのみである。これに対して墳長100m以上の古墳20基のうち残りの19基が台地・段丘および平野に立地している。台地・段丘をはじめとする平地部では土量は増大するが大型古墳を築造するためのスペースを確保しやすかったということを示唆するものである。

### (3) 今後の課題

地域における前方後円墳について、常陸、備前、大和、および関東地方と近畿地方中央部を事例に、各地の豪族の活動時期と古墳の築造時期との関連や豪族の根拠地と古墳築造地の関連などに着目し検討したが、豪族の活動時期の把握が難しかったり、古墳の築造時期が判明しないものが半数近くあったりしたことなどから、明確な見通しを得るまでには至らなかった。

全国的な前方後円墳の時期別・規模別の分布についての検討からは、3世紀末～6世紀後葉を通じて倭の社会に前方後円墳体制が成立していたと言え難いようである。その主要な理由は以下のようなことである。前方後円墳は西日本では4期にほぼ消滅状態になり、墳形による身分表示の1要素がほとんど意味をなさなくなっている。また、前期には方墳や円墳はまだ数が少ない。前方後円墳の時期別・規模別の分布からすると3期から7期くらいまでの間は規模による勢力表示機能はうかがえそうであるが、それ以外の時期については大和王権によるコントロールが十分機能しているようにはみえない。10期

編年での3期に奈良盆地内では大王級の古墳が存在する地域が数力所みられるし、5期には同様のことが奈良盆地（佐紀盾列古墳群）、河内平野（古市古墳群と百舌鳥古墳群）の間でもみられ、一元的な前方後円墳体制を想定する場合に解釈が困難な事例がみられる。

当初設定した目標を全て達成するところまでには至らず、上記以外にも残された課題は多い。本報告では時期別・規模別検討が中心となったが、全国の前方後円墳のデータベースを構築することができたので、今後本データベースを活用して、残された課題について引き続き検討を進めたい。

なお、構築した前方後円墳データベースを基礎に、成果発信のために、利用者が興味・関心に応じて自ら各種分布図を作成することができる「WebGISデータベース」を構築したので、公開に向けて作業を進めている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

出田和久・石崎研二・宮崎良美、「WebGISデータベースの試み 奈良盆地前方後円墳データベースを事例に」、『古代学』(査読有)、第6号、2014年、pp.1-11

出田和久・石崎研二・宮崎良美、「奈良盆地前方後円墳データベースの構築と課題 WebGISデータベースの一つの試み」、『第19回公開シンポジウム実行委員会編・発行『第19回公開シンポジウム 人文科学とデータベース 活用・継承する「データベース」と「データベース」による新知見』(査読なし)、2013年、pp.63-70

〔学会発表〕(計 2件)

出田和久、前方後円墳の地域性 - 分布論的アプローチ -、人文地理学会、平成27年11月14日、大阪大学待兼山キャンパス

出田和久・石崎研二・宮崎良美、「奈良盆地前方後円墳データベースの構築と課題 WebGISデータベースの一つの試み」、『第19回公開シンポジウム人文科学とデータベース、平成25年11月30日、立命館大学アート・リサーチセンター

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

出田 和久 (IDETA, Kazuhisa)

奈良女子大学研究院人文科学系・教授

研究者番号：40128335

### (2) 研究分担者

石崎 研二 (ISHIZAKI, Kenji)

奈良女子大学研究院人文科学系・教授

研究者番号：10281239

### (3) 連携研究者

宮崎 良美 (MIYAZAKI Yoshimi)

奈良女子大学古代学学術研究センター・特任助教

研究者番号：00612334